

ライオンズクエスト『思春期のライフスキル教育』
ライフスキル教育指導者養成ワークショップの
効果とライフスキル教育の課題に関する調査

特定非営利活動法人 青少年育成支援フォーラム (JIYD)

はじめに

「ライフスキル」という言葉はわが国に紹介されたのが比較的新しく、また日本語に訳されないままカタカナ語で使われることが多いため、残念ながら、未だにその言葉の意味や重要性が多くの人々に理解されているとは言えません。

しかし、今日の日本の社会で最も求められているものの一つがこの「ライフスキル」であることは確かです。なぜなら人々が互いに支え合い、信頼し合い、そして情報を共有してそれぞれの人生を豊かにするというところに、ライフスキルは大いに関係があるからです。また何か困難にぶつかったとき、ものごとがうまくいかなかったとき、あるいはつらいことがあって落ち込んでしまったときなど、周りの人々の支えを求めながら、自分で自分を励まし、勇気づけてもう一度元気を取り戻してゆくために必要な力だからです。¹

さらに付け加えれば、自分がこれまで学んできたことや、今自分が持っている力を、他の人のために、社会のために、将来の自分や家族のために、より創造的に生かすためにライフスキルは大いに役立ちます。つまりライフスキルは人々が共に生きるために、困難を乗り越えて、しっかりとそして豊かに生きるためにきわめて大事な能力なのです。

このライフスキルは1970年ごろから徐々に世界で注目されるようになりました。そして、その研究や実践の成果を反映した一つの例が『オタワ憲章』です。1986年にWHO（世界保健機関）の加盟国がカナダのオタワで会議を開き、世界の国々の人々の生活や健康を改善し、維持発展させるための指針となる基本施策を『オタワ憲章』として取り決めました。その中で人々のライフスキルの向上が5つの優先的行動の一つとして位置づけられたのです。^{2,3,4}

またユニセフやユネスコなど教育や健康問題に関する活動を地球規模で行っている国際機関も、ライフスキルの向上に重点を置いて取り組んでいます。基本的な学力を持つこと、そしてライフスキルを高めること、この2つを合わせることによって人々の生きる力を高めようとしているのです。^{5,6,7}

このような流れの中で多くの子どもを対象とした教育プログラムが開発されてきました。ライフスキルは小さな子どもから高齢者まで、どの世代の人々にも役立つ能力ですが、子どもの時からきちんと学んでおくことがより効果的だからです。また学習意欲を高めたり、問題行動を防止するという効果もあることが実証されていますから、学齢期、特に思春期・青年期に学ぶことは大いに意味のあることです。

ライオンズクラブが組織的な活動として普及活動に取り組んでいるライオンズクエスト『思春期のライフスキル教育』プログラムもそのような教育プログラムの一つですが、幅広い領域をカバーし、系統的な学習が出来る総合的なプログラムであるという点では、数少ないきわめて貴重な存在です。特にライフスキル教育がまだ学校教育の中に正式に位置づけられていないわが国では、ライフスキル教育を担える唯一のプログラムと言っても過言ではありません。^{8,9}

さて、ライオンズクエスト『思春期のライフスキル教育』プログラムも日本導入後10年が過ぎました。指導者養成のためのワークショップ開催回数も400回に迫り、受講者も10,000人を超えました(2010年12月末時点)。しかし、この数字はすべての学校でライフスキル教育が行われるようになってほしいという願いからすれば、ほんの微々たる数字に過ぎません。

そこで、10年という節目にあたり、これまでの成果を踏まえつつさらにライフスキル教育を発展させるために、ワークショップ受講者を対象に、ワークショップに参加したことをどのように受け止め、研修内容をどのように活用しているか、そして受講後学校でライフスキルの授業を実施したかどうかなどに関する調査を行いました。以下がその報告です。

今回の調査結果をもとに、ワークショップの改善を図るとともに、受講者に対する受講後のサポート体制の構築、教育委員会など教育関係機関への広報啓発活動などをより積極的に行うことを通して、ライオンズクエストプログラムのより一層の普及を図り、ライフスキル教育の発展に寄与できることを願っています。

カークパトリックモデル Kirkpatrick model¹⁰

今回のワークショップ評価にあたっては、カークパトリックモデルに準じて行いました。このモデルは専門職養成のプログラム評価として半世紀以上にわたって使われているもので、次の4つのステップで評価を行います。

- ステップ1 反応 Reaction 受講者が研修会への参加をどう受け止めたか
- ステップ2 学習 Learning 受講者が研修内容を学習できたか
- ステップ3 行動 Behavior 研修内容を活用し、受講後仕事上の行動が変わったか
- ステップ4 結果 Result 仕事上の成果が出たか

これをワークショップに応用すると、ステップ3は「教育活動に変化があったか、ライフスキル教育を実施したか」となり、ステップ4は「児童生徒のライフスキルは向上したか」となります。ただし、ステップ4については調査対象が児童生徒であるため別途行っており、今回の調査対象とはしていません。

結果の概要

2010年11月から2011年1月にかけて、わが国での数少ない総合的なライフスキル教育プログラムであるライオンズクエスト『思春期のライフスキル教育』プログラムのライフスキル教育指導者養成ワークショップ(以下ワークショップ)受講者を対象

に、ワークショップの効果の評価とライフスキル教育実施上の課題についての質問紙調査を行いました。

対象としたのは2009年および2010年7月、8月に開催した計63回のワークショップに参加した小学校、中学校の教員として登録のあった1,383名で、郵送により質問紙を送付し、438名(31.7%)から回答を得ることが出来ました。そのうち、記載漏れがあったり条件の整わなかったものをのぞいた416名の回答をもとに、ワークショップの受け止め方、自身のライフスキルの変化、受講後の教育活動の変化、ライフスキル教育(授業)の実施状況、そして学校において組織的・計画的にライフスキル教育を実施するための課題などについて集計と分析を行いました。

その結果、回答者の94.7%がワークショップを受講したことに「価値があった」と答え、「新しい指導方法を習得できた」(61.5%)、「ライフスキル教育についての理解深まった」(51.9%)等をその理由としてあげました。また、受講後約60.3%の人が各種の教育活動の中で研修で学んだ指導スキルを活用していました。そしてワークショップ受講後、自分自身のライフスキルに好ましい変化があったと答えた割合は62.7%でした。

受講後、学校においてライフスキルの授業を実施したかどうかについては、「授業を実施した」と答えた割合は受講後1年4~5ヶ月となる09年度受講者で約50%、4~5ヶ月となる10年度受講者で約33%でした。そして、自分自身のライフスキルに好ましい変化があったと答えた人は、そうでない人に比べて授業の実施割合が高い傾向が見られました。ただし、授業の実施は個人的に実施した人が多く、学年や学校として組織的・計画的に実施した人は必ずしも多くありませんでした。

学校において組織的・計画的に授業を実施するための課題については授業時間、準備時間、研修のための時間など、時間の確保をあげる人が多く、中でも「授業時間の確保」については回答者の4分の3が選択し、授業を実施したいという意欲はあっても、実際に実施するためには解決しなければならない課題が多くあることがわかりました。

1 調査の目的

ライフスキル教育のより一層の普及をはかるために、ライオンズクエスト『思春期のライフスキル教育』プログラムの評価活動の一環として、ワークショップの効果と、学校でライフスキル教育を実施する上での課題について、受講者に対する自記式質問紙(アンケート)調査を行い、受講者のワークショップの受け止めかた、ワークショップ受講後の教育活動の変化、ライフスキル教育の実施状況と、ライフスキル教育を組織的・計画的に実施する上での課題について明らかにします。

2 方法

<調査方式>

自記式質問紙(アンケート)を用いた横断的調査

<調査対象者>

2009年および2010年の7月21日から8月31日までの夏休み期間中に全国各地で開催した合計63回のワークショップの受講者で、JIYDへの登録が小学校教員と中学校教員であった1,383名(09年658名 10年725名)。

受講者のうちスクールカウンセラーや介助員などは通常授業を担当しないため、また高校教員、大学教員、教育委員会指導主事などは受講者が少数であることから、調査対象から除きました。

<ワークショップ>

主として学校から派遣された1回あたり20名から30数名の参加者で構成され、2日間16時間のトレーニングプログラムに従い、ライフスキルに関する知識と、ロールプレイやブレインストーミングなど、ライフスキル教育の指導方法を学習し、それらを応用した自己認識、問題解決、コミュニケーション、目標設定等をテーマとするライフスキルの授業を模擬的に体験します。

参加者の多くはライフスキル教育についてこれまで研修を受けた経験がなく、また自ら求めて参加した人も多くありません。ワークショップの指導は、このプログラムの著作権を保有するライオンズクラブ国際財団が規定する養成課程を修了し認定された「ライオンズクエスト認定講師」によって行われます。

<調査方法>

質問紙の作成

1. 専門職養成プログラムの効果を評価する Kirkpatrick model のレベル1からレベル3までの評価規準(表1)に準じて質問紙原案を作成。なお、レベル4は児童生徒が対象であり、別途調査を行うため、今回の調査には含めません。
2. 公衆衛生学・健康情報学研究者、大学院生による質問紙案の検討修正。
3. 小学校、中学校教員のグループを対象に質問内容についての意見聴取2回。
(ワークショップ未受講者対象1回、ワークショップ受講者対象1回)
4. 公衆衛生学・健康情報学研究者、大学院生による最終案の検討と質問紙の決定。

表1 Kirkpatrick model の評価規準とワークショップ評価への応用

Level 1 Reaction
・教育トレーニングに参加したことに対する参加者の満足度 *ワークショップ参加の価値評価
Level 2 Learning
・教育トレーニングによる参加者の知識やスキルの向上、態度の好ましい変化 *ライフスキル関連指導力向上
Level 3 Behavior
・教育トレーニングの結果として、職務上の知識、スキルの活用、態度の変化 *態度、教育活動の変化、授業の実施
Level 4 Results
・Level 3の結果、生産性の向上、マネジメントの改善、品質の向上等 *児童生徒のライフスキルの向上

調査

1. JIYD事務局が対象者名簿を作成し、それに基づき順次質問紙を郵送し、回答(無記名)を郵送で回収。実施期間は2010年11月～2011年1月。
2. 回答期限前1週間を目途に、再度回答を依頼(リマインド)するために全員に回答依頼の文書を郵送。
3. 回収された質問紙を調査担当者がJIYD事務局より受け取り、集計、解析。

＜調査項目＞

質問紙(資料参照)では、まずこのワークショップの総合的な評価として「ワークショップに参加した価値があったか」を尋ね、価値があったと答えた人に何に価値を感じたかを「ライフスキルとは何かを理解できた」、「新しい指導方法を習得できた」など6項目の中から選択を求めました(複数回答可)。

次に受講者自身のライフスキルに好ましい変化があったかどうかを、「児童、生徒への接し方」、「課題や問題の受け止め方」、「自尊感情」の3項目について尋ねました。

続いてワークショップで学んだ指導方法を教育活動の中で活用したかどうかを尋ね、どのような場面で活用したかを、「教科指導」、「道徳」、「クラブ活動の指導」など7項目から選択を求めました(複数回答可)。以上については複数回答可の間を除き「あった」(活用した)、「どちらとも言えない」、「なかった」(活用していない)からの選択を答えとしました。

次にライフスキルの授業を受講後実施したかどうかを、「(受講前から実施していた)継続して実施した」、「新たに実施した」、「実施していない」から選択を求め、先の2つから選択した人には「組織的实施」か「個人的実施」かを尋ねました。ここで言う組織的实施とは学校としての合意を元にカリキュラムに位置づけて計画的に実施したもの、個人的実施とは教員個人の裁量の範囲内で学級活動などの時間を使って実施したものを指します。

「実施していない」を選択した人には、「今後実施予定」か「実施を検討中」か「実施予定がない」かを尋ねました。さらに「実施予定がない」を選択した人にはその理由を「必要性を感じない」、「実施したいが実施する立場ではない」など6項目の中から選択を求めました(複数回答)。

続いてライフスキル教育を学校において組織的・計画的に実施するとした場合どのような課題があると考えるかについて「管理職の理解・承認」、「教員間の合意」、「授業時間の確保」など11項目から重要と思われるものから順位をつけ3項目の選択を求めました。

最後に回答者の属性について勤務校種、職種、性、年代、教職経験年数、担任の有無、受講年度などの記入を求めました。

3 結果

＜回答者数＞

質問紙の送付 1,383 に対して、回答があったのは 438、「宛先不明」などで差戻された 16 を除いた回答割合は 32.0%でした。回答のうち、JIYD の受講者登録とは異なり、実際には相談員や高校教諭など小学校、中学校教員以外であった人 13 と、校種、職種など属性に不記載があったもの 9 をのぞ

表2 質問紙の送付数、差戻数、回答数、回答%

校種・性別	小学校男	小学校女	中学校男	中学校女	計	
09年	送付数	116	161	202	180	659
	差戻数	2	2	4	3	11
	回答数	28	34	45	36	143
	回答%	24.6	21.4	22.7	20.3	22.1
10年	送付数	111	212	197	204	724
	差戻数	1	0	3	1	5
	回答数	39	71	91	86	287
	回答%	35.5	33.5	46.9	42.4	39.9

※回答数には属性の記載がなかった人 8 を含めていません

き、416(30.1%)を解析対象としました。

校種別、性別の送付数、差戻数、回答数、回答割合は表2に、解析対象者の年度別校種別年代別回答者数と年度別校種別職種別回答者数は表3、表4に示しました。

性別は全体で男197(47.4%)、女219(52.6%)、校種別では小学校が男66(39.5%)、女101(60.5%)、中学校が男131(52.6%)、女118(47.4%)でした。また対象者のうち主として授業を行う教諭は全体で315(75.7%)、校種別では小学校131(78.4%)、中学校184(73.9%)でした。

対象者の構成割合は全国の公立小中学校教員(2008年)の構成割合と比較すると、中学校教員の割合が高く(全国36.1%、対象者56.7%)、男女比では小学校教員はほぼ同割合でしたが、中学校教員は女性の割合が高い結果となりました(全国41.9%、対象者47.4%)。

<主な回答結果>

ワークショップへの参加の価値

まず回答者416のうち、「ワークショップに参加した価値があったか」の問いには、「あった」が394(94.7%)で、「なかった」は1(0.2%)でした。

また「あった」と答えた者に対して何に価値を感じたかの問いに対しては、「ライフスキルについての理解」195(46.9%)、「ライフスキル教育についての理解」216(51.9%)、「新しい指導方法を習得できた」256(61.5%)、「児童生徒の理解が深まった」66(15.9%)、「よい集団をつくることの重要性の理解が深まった」185(44.5%)、「その他」9(2.2%)でした。この間についての小学校教諭、中学校教諭、管理職別の回答割合は表5に示しました。

受講者自身のライフスキルの変化

次に「児童生徒への接し方」、「課題や問題の受け止め方」、「自尊感情」の受講者自身のライフスキルに関わる3項目について、ワークショップ受講後好ましい変化

表3 年度別校種別年代別回答者数

校種年代	小学校		中学校		計
	09	10	09	10	
20代	13	15	8	29	65
30代	12	26	14	40	92
40代	20	36	32	53	141
50代	13	30	23	49	115
60代	1	1	1	0	3
計	59	108	78	171	416

表4 年度別校種別職種別回答者数

校種職種	小学校		中学校		計
	09	10	09	10	
校長	1	2	6	9	18
教頭	3	8	5	8	24
教諭	49	82	61	123	315
講師	4	8	1	18	31
養護教諭	2	8	5	13	28
計	59	108	78	171	416

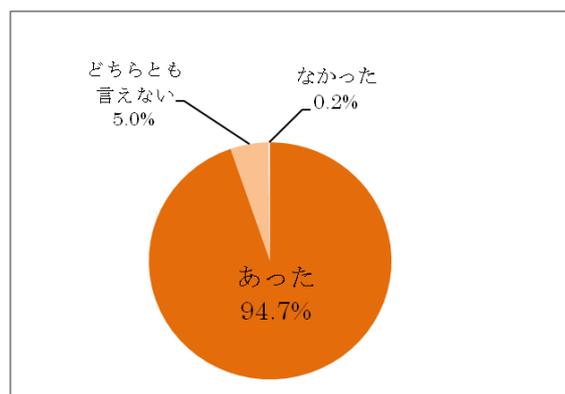


図1 ワークショップに参加した価値があったか

表5 何に価値を感じたかの回答割合(%)

	小教諭 n=131	中教諭 n=184	管理職 n=42
ライフスキルについての理解	44.3	49.5	69.8
ライフスキル教育についての理解	48.9	57.1	51.2
新しい指導方法を習得できた	62.6	63.0	48.8
児童生徒理解が深まった	22.1	8.2	23.3
良い集団を作る重要性の理解	50.4	37.5	51.2
その他	3.1	0.0	7.0

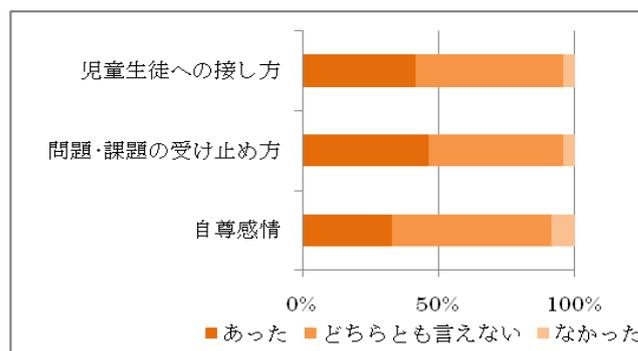


図2 自身のライフスキルの好ましい変化があったか

あったかの問いに対しては、「児童生徒への接し方」で「あった」173(41.6%)、「課題・問題の受け止め方」で「あった」193(46.4%)、「自尊感情」で「あった」136(32.7%)でした。「なかった」との回答はそれぞれ17(4.1%)、18(4.3%)、36(8.7%)でした。

また、これらの問いに対して3項目すべて好ましい変化があったと答えた人数は78(18.8%)、2項目は88(21.2%)、1項目は95(22.8%)で、ライフスキルに関して1項目以上好ましい変化があった人数は261(62.7%)でした。「あった」がどの項目にもなかった人数は155(37.3%)でした。

これを主として授業に携わる教諭315人に限定してみると、3項目とも好ましい変化が「あった」と答えた人数は58(18.4%)、2項目は64(20.3%)、1項目は71(22.5%)、合わせて193(61.3%)となり、「あった」がどの項目にもなかった人数は122(38.7%)でした。ちなみに1項目でも好ましい変化があったと答えた人の割合の合計は、養護教諭67.9%、講師は67.7%、管理職は65.1%でした。

研修内容の活用

ワークショップで学んだ指導手法を各種の教育活動の中で活用したかの問いに対しては、「活用した」が251(60.3%)でした。これを職種別に見ると小学校教諭では「活用した」が89(67.9%)、中学校教諭では117(63.6%)で、基本的に授業を行わない養護教諭、管理職もそれぞれ16(57.1%)、21(48.8%)が「活用した」と答えました。どのような領域で活用したのかは表6に示しました。

研修内容の活用場面	数	%
教科指導	107	42.6
特別活動	105	41.8
道徳	74	29.5
生徒指導	65	25.9
総合的学習	47	18.7
クラブ活動	25	10.0
保護者との面談	22	8.8
その他	20	8.0

ライフスキルの授業の実施

続いて、ワークショップの最も重要な成果と考えられる受講後のライフスキルの授業の実施状況については、「継続して実施した」22(5.3%)、「新たに実施した」138(33.2%)、「実施していない」256(61.5%)でした。

	2009年 n=137	2010年 n=279
受講者416	継続して実施22(5.3%)	10(7.3%)
	新たに実施138(33.2%)	79(28.3%)
未実施256	実施予定13(3.1%)	11(3.9%)
	検討中143(34.4%)	113(40.5%)
	予定なし100(24.0%)	64(22.9%)

実施していないと答えた人の内訳は、「実施予定である」13、「実施するかどうか検討中」143、「実施する予定がない」100で、それぞれ総回答者数に対する割合は3.1%、34.4%、24.0%でした。これらの年度別内訳は表7に示しました。

また、授業未実施者で今後も「実施する予定がない」と答えた人100があげた理由(複数回答)は、「実施したいが、担任ではないなど授業実施する立場ではない」61(61.6%)、「実施したいが、授業時間の確保ができない」26(26.3%)、「類似のプログラムを実施している」11(11.1%)、「実施したいが学年や学校として授業実施の合意が出来ない」5(5.1%)、「実施したいが、授業のやり方がわからない」4(4.0%)、「必要性を感じない」3(3.0%)、「その他」9(9.1%)でした。なお、継続実施者と新たな実

施者 160 のうち授業を組織的に実施した人数は 65 (40.6%) で、総回答者に対する割合は 15.6%、残りは個人的な実施でした。

この授業実施に関して、教諭について先に挙げた自分自身のライフスキルに好ましい変化があったかの回答とクロスさせてみると、好ましい変化が 3 つあった群 58 の授業実施者は 36 (62.1%)、2 つあった群 65 では 31 (47.7%)、1 つあった群 70 では 32 (45.7%)、なかった群 122 では 45 (36.9%) でした。

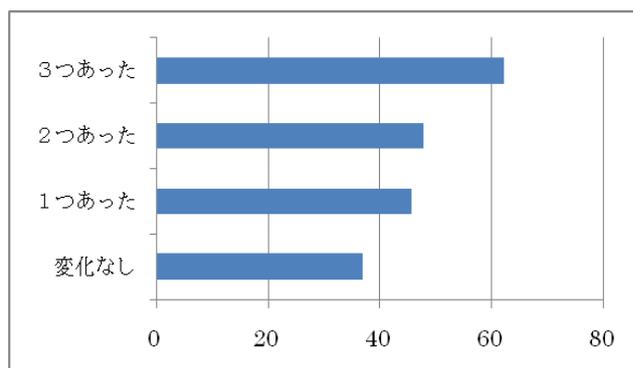


図3 ライフスキルの好ましい変化の数と授業実施割合 (%)

ライフスキル教育実施の課題

最後に、ライフスキル教育(授業)を学校で組織的・計画的に実施しようとした場合、どのような課題が考えられるかの回答について、1位に選択されたものに3点、2位に2点、3位に1点を配し、それぞれの項目の選択者数と平均得点を表8に示しました。最も選択者が多かったのが「授業時間の確保」の306(73.6%)で、続いて「ライフスキル教育の研修時間の確保」195(46.9%)、「教員間の合意」187(44.9%)、「担当教員のライフスキル教育の指導力」186(44.7%)、「教材作成等授業の準備時間の確保」172(41.3%)でした。

表8 カテゴリー別課題の選択者数と平均得点

＜関係者の合意＞	選択者数	平均得点
教員間の合意	187	2.1
管理職の理解・承認	49	2.0
教育委員会の理解・承認	28	2.2
保護者の理解	7	2.0
＜時間的位置づけ＞		
授業時間の確保	306	2.4
教材作成等授業の準備時間の確保	172	1.8
ライフスキル教育の研修時間の確保	195	1.9
＜教員の指導力＞		
担当教員のライフスキル教育の指導力	186	1.9
＜サポート＞		
教材購入や資料作成のための予算	44	1.3
研修や情報提供等に関する学外からの支援	24	1.7
その他	10	1.9

これを、X軸を選択者数、Y軸を平均得点としてプロットしたものが図4です。「授業時間の確保」は選択者が多く、しかも多くが上位に選んでいました。「教育委員会の同意」や「管理職の理解・同意」、「保護者の理解」は、選択者は少数でしたが、選択した人は中上位に選んでいました。「予算」と「研修や情報提供等に関する学外からの支援」に関しては選択者も少なく、上位では選ばれていませんでした。

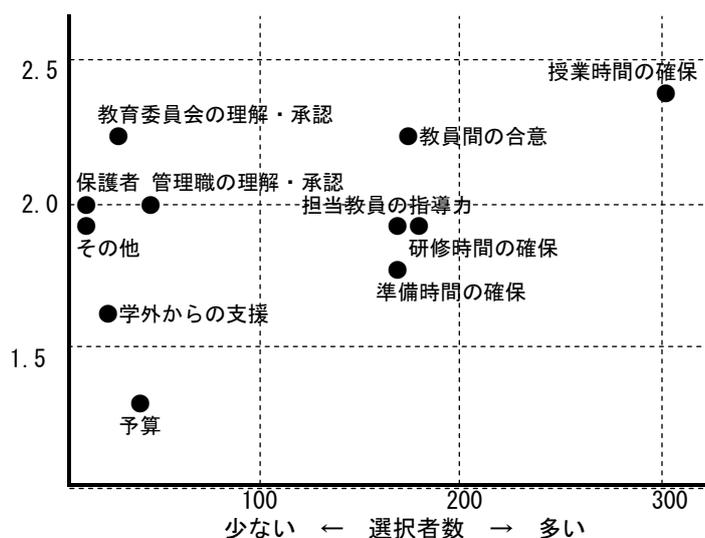


図4 ライフスキル授業の組織的実施の課題

4 考察

ワークショップは、ライフスキル教育の指導者を養成するためものですが、その目的は受講者が指導方法を習得することで完結するのではなく、教育活動の中でそれらを活用し、ライフスキルの授業を実施して児童生徒のライフスキルの向上という好ましい態度や行動の変化を導き出して初めて意味を持ちます。これが今回 Kirkpatrick model に準じて評価を行った理由です。

ただし、回答割合が全体で 30%程度であり、過半の非回答者の意思是今回の調査結果には反映されていませんので、このことが本来明らかにされるべき真の結果をゆがめている可能性を否定できません。

ワークショップ終了直前に記入してもらったアンケート調査ではワークショップの受講やライフスキル教育の学校への導入に関しては圧倒的多数が肯定的な回答を示していますので、今回回答を寄せてくれなかった受講者も、回答者と似た意見を持っている可能性は高いと思われますが、それはあくまでも推測の域を出ませんので、結果および評価はすべて回答に応じた者に関する限定的なものとしします。

回答結果から、まず、第1点として受講者はワークショップへの参加を肯定的にとらえ、学習し、多くが受講後その学習内容を教育活動の中で活用していました。しかし、最重要の授業の実施については実施と未実施に分かれ、さらに約4分の1がこれからも授業を実施する予定がないと答えた点が注目されます。

また第2点としてワークショップはライフスキルの指導方法についての研修であるにもかかわらず、受講者自身のライフスキルに好ましい変化があったことも注目されることです。これらについて以下順を追って見てゆきます。

ワークショップへの参加については肯定的評価

まず、Kirkpatrick は「レベル1 反応」を“顧客満足度の尺度”と呼んで、「レベル2 学習」の成果を高め、受講者を派遣した者(今回の場合は教育委員会や校長)が次の受講者を派遣するという意思決定に影響をおよぼす重要な評価レベルと位置づけています。ライフスキルについての関心や十分な知識を持たず、管理職や教育委員会からの指示や勧めで参加した者が多数を占める中、94.7%がワークショップへの参加を価値ありと答えたことは、研修内容が現代の教育課題や回答者のニーズに合致し、肯定的な反応を導き出したと考えられます。

ワークショップでよく学び、それを活用

次に「レベル2 学習」については、事前テストと事後テストの比較による知識の習得状況の測定や、第三者による指導スキルの観察評価は行っていませんので、回答者本人の報告のみに頼らざるを得ませんが、新しい指導方法を習得できた(61.5%)、ライフスキル教育の理解が深まった(51.9%)等の回答や、「レベル3」に関連する受講後指導方法を活用した、あるいは自身のライフスキルの好ましい変化があったなどの回答から、回答者においては「レベル2 学習」が十分成立していたと推測できます。

この「学習」に関連して、何に価値を感じたかの選択肢である「ライフスキルについての理解」を学校の意志決定に大きな影響力を持つ管理職の69.8%が選択していたこ

とは、ライフスキル教育の普及という観点からは興味深い結果です。

また、教諭で最も選択率が高かった「新しい指導方法を習得できた」は、一斉指導が一般的なわが国の教員にとって、ライフスキル教育が基本とする小グループによる学習形態や、具体的な問題をテーマにブレインストーミング、ロールプレイ、ディスカッションなどの手法を使って学習する指導方法を好意的に受け止めた結果であると考えられます。このことは、医療関係者を対象とした患者教育のトレーニング・プログラムにおいて、小グループによるロールプレイ等を使い、具体的問題をテーマとした体験的学習活動が効果的であったという報告^{11,12}と一致します。

授業実施にいたる大きな壁

「レベル 3 行動」については先の 2 つのレベルとは異なり簡単に評価することが出来ません。それは回答者の 60.3%が受講後学習した指導スキルを教育活動の中で活用したと答え、自身のライフスキルに関しても、一つ以上好ましい変化があったと 62.7%が答えて受講後の態度、行動の変化を報告している一方で、授業の継続実施と新たな実施は両年度合わせて全体で 40%に満たず、しかも多くが個人的実施にとどまっていることです。

さらに回答者の約 4 分の 1 が実施予定はないと答えていることは、ここにワークショップとして大きな課題、すなわち「レベル 4 結果」への到達を阻む障壁が存在していることを示しています。

実施予定がない理由として上位にあげられていたのが「実施したいが、担任ではないなどする立場ではない」と「実施したいが授業時間を確保できない」でした。前者に関しては、授業実施を前提として指導者養成を行うワークショップに、実施する立場ではない者（養護教諭、管理職、介助員、スクールカウンセラーなど）を今後とも参加対象とするのか、もし参加対象とするならその人たちにどのような役割を期待するのかなど、ワークショップの目的をもう少し明確にする必要があります。また後者に関しては、受講者自身の個人的要因というより、学校教育の制度上の要因により関係が強いと推測されることから、それを視野に入れたワークショップの改善を図る必要があります。

「時間」をどう解決するか

このことを裏付けるのが、学校でライフスキル教育を組織的・計画的に実施とした場合の課題についての回答者の選択です。回答によれば授業、準備、研修のための時間確保が教員間の合意、教員の指導力とともに重要視され、特に授業時間の確保については回答者の約 4 分の 3 がこれを選択し、しかも多くの人が上位に選択していました。

この課題の根本的解決にはライフスキル教育が学校で教科として位置づけられる日を待たなければなりません。別の観点で見ると時間の問題が解決できれば、現在の教育制度の元でも組織的・計画的に実施することは可能であるということが出来ます。すでにわが国では全校で組織的・計画的にライオンズクエストのプログラムを実施している学校(=モデル校)が約 50 校ありますので、これらの学校では時間の確保をは

じめとする課題をどのように解決したのかという情報をワークショップで共有することが必要かつ効果的だと思われます。

ライフスキル教育の実現には受講者のライフスキルが必要

ところで今回の質問紙調査では、本来ワークショップの主たる目的ではない受講者自身のライフスキルの変化についても尋ねました。それは人々のライフスキルの改善が積極的な社会参画と地域のエンパワーメントに重要であるとのヘルスプロモーションの理念を念頭に²、ワークショップが受講者のライフスキル改善に影響を与え得るかを探るためでした。

回答結果によると自身のライフスキルに好ましい変化が一つ以上あった人数が6割以上ありました。指導方法の習得を主目的とするワークショップでありながら受講者自身のライフスキルが改善されていたのです。また、一時点からの思い出しで、タイムライン上の前後を問うていないので因果関係を決定するには不十分ですが、回答者のライフスキルの好ましい変化の数と授業実施割合に正の関係性がうかがえたことは、回答者から得られた一つの知見として大切にすべきだと思われます。

受講者が学校でライフスキル教育を組織的・計画的に実施してゆくためには、ライフスキル教育の必要性や効果を職場で提言し、校長や教員仲間を説得し、時間を確保するために進んでカリキュラムを改善するなど、ライフスキルに関する知識とは別の力、すなわち受講者自身のライフスキルと、それを遂行する意欲や自己効力感が求められます。そういう意味で、ワークショップでは指導方法に加え、受講者のライフスキルの改善により焦点を当てることが、今後のライフスキル教育の普及、学校での実施の促進につながるのではないかと推測されます。

5 本調査の限界と課題

第1点として、質問紙の回収割合です。09年度受講者の回収割合は22.1%、10年度受講者では39.9%でした。もしワークショップへの参加について否定的な評価をしていることや、指導方法を活用していないこと、またライフスキルの授業を実施していないことが回答しないことを促した理由だと仮定すると、今回の回答者のみによる結果は逆転してしまう可能性があります。

例えば09年と10年の授業実施率の差は、受講後の期間の長さのちがいを反映したものであると考えることも出来ますが、授業を実施していない人が回答をためらった結果、相対的に09年の実施率を引き上げたとも考えられます。

質問紙は自宅住所の登録がない人には勤務校宛発送しました。学校では期末の異動に加えて、年間を通じて産児・育児休暇、研修機関への派遣、講師期間の終了に伴う退職などが少なからずあり、これらの場合には対象者に質問紙が届かなかった可能性があります。また送付から回収にあたる時期が2学期末という教員にとって事務作業が急増する時期と重なったことが回収割合を押し下げた可能性も考えられます。さらにリマインド(回答してほしいというお願い)の送付後の回収が111(26.5%)、回答期限を越えて届いたものが43(10.3%)あったことは、リマインドの回数や期限の設定が適切であったかどうか再検討の余地があります。

加えて、ワークショップ終了後受講者に対する情報提供や、受講者からの情報収集などのフォローアップ体制がなく、回収率を押し上げる方向に作用するであろう実施者と受講者の継続的な関係の構築がなされていなかったことも大きな課題として残ります。ワークショップの最終的な成果が子どもたちの好ましい変化とすれば、今後の運営にあたっては、Kirkpatrick model などの評価モデルをガイドラインに、評価システムそのものをプログラムに組み込み、ワークショップの評価と受講者からの意見聴取を継続的に行う体制を構築することが必要です。

第2点は、今回の評価では、ワークショップを指導した講師の指導力、受講者の受講動機、ライフスキル教育に対する所属校の管理職の考え方、受講後学校での受講者の受け入れ方などを考慮していないことです。

がん患者のケアにあたる医療従事者のコミュニケーション能力のトレーニング・プログラムについてのコクラン報告書 Cochrane review は、2,824 の論文をレビューし、条件をクリアした3つについて、いくつかのコミュニケーション能力の向上に効果があったと認めています。それはトレーニングを行った講師の個人的資質や、参加者の熱心さによる可能性もあり、トレーニング・プログラムの効果とするにはさらなる研究が必要であると結論づけています¹³。ワークショップをより精緻に評価するためには、今回の結果をベースに、さらなる調査が必要です。

6 まとめ

回答者においてはワークショップへの参加の満足度は高く、Kirkpatrick model の各レベル(1 反応、2 学習、3 行動)で一定の効果が認められました。しかし、ライフスキル教育の組織的・計画的実施には授業時間の確保など大きな障壁があり、それらを受講者自身が進んで解決し、授業を実施してゆけるよう、ワークショップではライフスキルに関する知識や指導スキルに加えて、受講者のライフスキルに焦点を当てた研修と既実施校の情報共有が求められます。

ただし今回の調査では過半の受講者から回答を得ることが出来なかったことから、この結果を受講者全体の評価として敷衍することは出来ません。長期的見通しに立った受講者との関係やフォローアップ体制の構築等の改善に取り組みながら、改めての調査が必要です。

7 参考文献

- 1 Division of mental health. Life skills education in schools. Geneva: World Health Organization; 1994
- 2 Nutbeam D. Health literacy as a public health goal: a challenge for contemporary health education and communication strategies into the 21st century. Health Promot Int. 2000; 15(3):259-67
- 3 Hubley J. & Coleman J. Practical Health Promotion. Cambridge: Polity Press;2008
- 4 Hubley J. Communicating Health: An action guide to health education and health promotion. Oxford: Macmillan Press; 2002
- 5 UNICEF <http://www.unicef.org/lifeskills/> (accessed 2011/01/11)

- 6 UNESCO The Dakar Framework for Action.
<http://unesdoc.unesco.org/images/0012/001211/121147e.pdf> (accessed 2011/01/11)
- 7 Nutbeam D. Health promotion glossary. Health Promot Int. 1998;13(4):349-64
- 8 Lions Quest Skills for Adolescence Third edition. Newark: Quest International;1992
- 9 Lions Quest Skills for Adolescence Fourth edition. Baltimor: Quest International;2001
- 10 Kirkpatric D, Kirkpatric J. Evaluating training programs 3rd ed. San Francisco:
Berrett-Koehler Publishers Inc.;2006
- 11 Wong J. and Agisheva K. Developing teaching skills for medical educators in Russia: a cross-cultural faculty development project. Medical Edu 2007;41:318-24
- 12 Jones J. et al. Maximizing your patient education skills (MPES): A multi-cite evaluation of an innovative patient education skills training course for oncology health care professionals. Patient Education and Counseling. Ireland: Elsevier Ltd;2010
- 13 Moore PM, Wilkinson SSM, Rivera S. Communication skills training for health care professionals working with cancer patients, their families and/or carers. Cochrane Database of Systematic Reviews 2004, Issue 2. Art. No.:CD003751.DOI: 10.1002/14651858. CD003751. pub2.

2011年4月

調査担当者 北山敏和

青少年育成支援フォーラムライオンズクエスト認定講師
京都大学大学院医学研究科

本調査は、ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会より費用の一部をご支援いただき実施しました。

資料

<質問票>

下記の質問について当てはまるものの番号を○で囲んでください。()内には数値を入れてください。

「その他」の場合には()内に具体的にお書き下さい。

1 ワークショップへの参加について伺います

1) あなたにとって、2日間のワークショップは参加した価値がありましたか

- 1 あった →2)へ
- 2 どちらとも言えない
- 3 なかった

2) あったと回答された方に伺います。

どのようなことに価値を感じられましたか(複数回答可)

- 1 ライフスキルとは何か理解できた
- 2 ライフスキル教育について理解できた
- 3 新しい指導手法を習得できた
- 4 児童・生徒の理解が深まった
- 5 よい集団をつくることの重要性の理解が深まった
- 6 その他()

2 ワークショップ受講後のあなた自身の変化について、お教えてください

1) あなたの、児童・生徒への接し方に好ましい変化がありましたか

- 1 変化があった
- 2 どちらとも言えない
- 3 なかった

2) あなたが出会う課題や問題の受け止め方に好ましい変化がありましたか

- 1 変化があった
- 2 どちらとも言えない
- 3 なかった

3) あなた自身の自尊感情に好ましい変化がありましたか

- 1 変化があった
- 2 どちらとも言えない
- 3 なかった

3 ワークショップで学んだ指導手法(ブレインストーミング、グループ分け、エナジャイザー、話の聴き方など)の活用について、お伺いします

1) 指導手法は教育活動の中で活用されましたか

- 1 活用した →2)へ
- 2 どちらとも言えない
- 3 活用していない

2) 活用したと答えられた方に伺います どの場面で活用されましたか(複数回答可)

- | | | |
|---------|-----------|-----------|
| 1 教科指導 | 2 特別活動 | 3 道徳 |
| 4 生徒指導 | 5 クラブ活動指導 | 6 保護者との面談 |
| 7 その他 (| |) |

4 ワークショップで提唱したライフスキル教育の授業の実施についてお伺いします

1) あなたの学校ではワークショップ受講前からライフスキル教育を実施していましたか

- 1 組織的、計画的に実施していた
- 2 個人的に実施している先生がいた
- 3 実施していない

2) ワークショップ受講後、あなたはライフスキルの授業を実施しましたか

- 1 受講前から実施していたので、それを継続して実施した →3)へ
- 2 新たに実施した →3)へ
- 3 実施していない →4)、5)へ

3) 授業を実施したと答えた方に伺います

授業は

- 1 個人的に実施した
- 2 学年や学校として組織的、計画的に実施した

ワークショップ受講後これまでに、1学級あたり何時間実施しましたか

() 時間程度

4) 授業を実施していないと答えた方に伺います

授業は

- 1 今後実施することが決まっている
- 2 実施するか検討中
- 3 実施する予定はない →5)へ

5) 授業を実施しない理由をお教えてください(複数回答可)

- 1 実施する必要性を感じない
- 2 類似の内容を他の授業としてやっているのでやらない
- 3 実施したいが、担任ではないなど、授業を実施する立場ではない
- 4 実施したいが、授業時間を確保できない
- 5 実施したいが、授業のやり方がよくわからない
- 6 実施したいが、学年や学校として授業実施の合意が出来ない
- 7 その他 ()

次のページへ

5 学年あるいは学校で、組織的、計画的に、一定時間ライフスキル教育を実施しようとしたときの課題について伺います

下記の中から、もっとも大きい課題だと思われるものに1、次に大きいと思われるものに2、三番目に大きいと思われるものに3を（ ）の中に記入してください

(選ぶ項目は合わせて3つです)

- () 1 教育委員会の理解・承認
- () 2 管理職の理解・承認
- () 3 教員間の合意
- () 4 保護者の理解
- () 5 授業時間の確保(ライフスキル教育の位置づけ)
- () 6 ライフスキル教育のための研修時間の確保
- () 7 教材作成等授業の準備時間の確保
- () 8 担当教員のライフスキル教育の指導力
- () 9 教員研修や情報提供などに関する学外からの支援
- () 10 教材購入や資料作成のための予算
- () 11 その他 ()

6 最後にあなたについてお伺いします。

ご参加のワークショップ

1 2009年(昨年度) 2 2010年(今年度)

性別 1 男 2 女

年代 1 20代 2 30代 3 40代 4 50代 5 60代

校種 1 小学校 2 中学校

教職経験年数 () 年

職種 1 校長/教頭 2 教諭 3 講師(助教諭等を含む)

4 養護教諭(養護助教諭等を含む)

5 その他 ()

担任 1 持っている ()年生 2 持っていない

全校児童・生徒数 約()名

ご協力ありがとうございました。
同封の封筒に入れご返送ください。